

『サムスクチェンモ』『サムスクチュンワ』における問答記述

青原 彰子

0 はじめに

デプン寺ゴマン学堂の僧院教育には「問答」(bsdus)・「論理」(rtags rigs)・「心理」(blo rig)・「般若」(phar phyin)・「中観」(dbu ma)・「俱舍」(mdzod)・「律」(bka' rams) という課程 (rtsod gzhang) がある¹。各課程には講義の時間と問答実践の時間が設けられている²。「問答」の課程において問答の実践法と問答形式を学ぶことは、上級課程に進むためには必須である。上級課程においても各課程に応じた問答実践が求められると同時に、上級課程の講義のための教科書も問答形式によって記述されているからである。

「問答」課程の講義教科書がドウラ (bsdus grwa) 書である。ドウラ書の構成や問答の内容については、小野田 [1989(1), 1992]、福田 [2002]、Daniel E. Perdue [1992] によって明らかにされている。その論理的な考察については、小野田 [1992]、木村 [1996-1998]、福田 [2003, 2004, 2010] など数多くの研究がある。これに対して、「論理」課程以降の講義教科書における問答形式についてはこれまであまり関心が払われてこなかった。本稿は、「般若」の課程の教科書であるジャムヤンシェーパ ('Jam dbyangs bzhad pa, 1648-1721)³が著した『サムスクチェンモ』(bSam gzugs chen mo⁴、『四

静慮四無色大論』) とその縮約書であるクンチョック・ジクメーワンポ (dKon mchog 'jigs med dbang po, 1728-1791)⁵著『サムスクチュンワ』(bSam gzugs chun ba⁶、『四静慮四無色定小論』)⁷を取り上げ、同書の論述形式を考察することで講義教科書における問答形式の一端を明らかにするものである。

1 『セードウラ』問答記述

デプン寺ゴマン学堂ではドウラ書としてセーガクワントシ (bSe ngag dbang bkra shis, 1678-1738)⁸著『セードウラ』(bSe bsdus grwa⁹、『セーガクワントシのドウラ』) が使用される。まず、『セードウラ』によって、問答の基本の枠組として、問答記述の基本類型を提示する。問答を

par bzhag pa'i bstan bcos thub bstan mdzes rgyan lung dang rigs pa'i rgya mtsho skal bzang dga' byed" (『四静慮四無色定の諸静慮を論述する仏教の美しい飾りであり経と合致する偉大な得難い良縁』)

⁵クンチョック・ジクメーワンポは、ジャムヤンシェーパ II 世、チベット仏教独特の転生活仏によるジャムヤンシェーパの継承者である。

⁶正式には "bSam gzugs chen mo las mdo bsdus te bkod pa bsam gzugs kyi rnam bzhag legs bshad bum bzang" (『四静慮四無色定大論を簡略にまとめて四静慮四無色定の規定の主意をよく解説した善瓶』)

⁷「般若」の課程の教科書にはこれ以外にもジャムヤンシェーパ著『般若全明宝灯明』(Phar phyin skabs dang po-skabs brgyad pa) 等がある。

⁸ジャムヤンシェーパの一番弟子と伝えられている。

⁹正式には "Tshad ma'i dgongs 'grel gyi bstan bcos chen po rnam 'grel gyi don gcig tu dril ba blo rab 'bring tha ma gsum du ston pa legs bshad chen po mkhas pa'i mgul rgyan skal bzang re ba kun skong" (『量の密意を注釈する大論として内容をひとつにまとめて上中下の心に示し偉大な善説で智慧のお首に飾られる良縁であり希望がすべてを満たすもの』)

¹各学堂の教育課程については、小野田 [1992] を参照。

²僧院教育の概要については、ゲシェーラブテン・小野田 [1984, 1989(2), 2000] を参照。

³ジャムヤンシェーパは、デプン寺ゴマン学堂の重要な教科書のほとんどを著述している。

⁴正式には "bSam gzugs kyi snyoms 'jug rnam kyi rnam

翻訳するにあたっては、福田 [2002, 2010] の問答についての訳語を踏襲している。

『セードウラ』の冒頭の問答 [G40.12] を例にして説明する。A【対論者の主張】、B【対論者の主張を問答する】、C【答論者が自分の主張を問答する】の三つの部分に分けて示す。

kha cig na re / kha dog yin na dmar po yin pas khyab zer na / chos dung dkar po'i kha dog chos can / dmar po yin par thal / kha dog yin pa'i phyir / khyab pa khas / ma grub na / chos dung dkar po'i kha dog chos can / kha dog yin par thal / dkar po yin pa'i phyir / ma grub na / chos dung dkar po'i kha dog chos can / dkar po yin par thal / chos dung dkar po'i kha dog dang gcig yin pa'i phyir / rtsa bar 'dod na / chos dung dkar po'i kha dog chos can / dmar po ma yin par thal / dkar po yin pa'i phyir / ma khyab na khyab pa yod par thal / dkar po dang dmar po gnyis kyi gzhi mthun med pa'i phyir / ma grub na / dkar po dang dmar po gnyis kyi gzhi mthun med par thar / dkar po dang dmar po gnyis 'gal ba yin pa'i phyir /

〔対論者〕 〔答論者〕

A【対論者の主張】

kha cig na re /

ある人が〔次のように〕言う。

kha dog yin na dmar po yin pas khyab zer na /

〔それが〕色であるならば、〔それは〕赤であることによって遍充される¹⁰、と言うならば

B【対論者の主張を問答する】

chos dung dkar po'i kha dog chos can /

法螺貝の色を主題として、

dmar po yin par thal /

赤であることが帰結する¹¹。

kha dog yin pa'i phyir /

なぜならば、色であるからである¹²。

khyab pa khas /

〔あなたが〔それが〕色であるならば、〔それは〕赤であることによって〕遍充されることを認めている。

ma grub na /¹³

〔その論証因は〕成立しない、と言うならば、

chos dung dkar po'i kha dog chos can /

法螺貝の色を主題として、

kha dog yin par thal /

色であることが帰結する。

dkar po yin pa'i phyir /

なぜならば、白であるからである。

ma grub na /

〔その論証因は〕成立しない、と言うならば、

chos dung dkar po'i kha dog chos can /

法螺貝の色を主題として、

dkar po yin par thal /

白であることが帰結する。

chos dung dkar po'i kha dog dang gcig

yin pa'i phyir /

なぜならば、白い法螺貝の色と同じ

であるからである。

〔対論者は、答に窮するか、認める ('dod¹⁴)。ここで問答は一端終了する。〕

rtsa bar 'dod na

〔対論者が〕もとの主張を〔まだ〕するならば、

〔kha dog yin na dmar po yin pas khyab /〕

〔それが〕色であるならば、〔それは〕必ず、赤である。〕

C【答論者が自分の主張を問答する】

chos dung dkar po'i kha dog chos can /

法螺貝の色を主題として、

dmar po ma yin par thal /

赤でないことが帰結する。

dkar po yin pa'i phyir /

なぜならば、白であるからである。

ma khyab na

〔その論証因がその帰結によって〕遍充されていない、

と言うならば、

khyab pa yod par thal /

¹⁰福田 [2002: ix-x] を参照。

¹¹対論者の主張の能遍を帰結とする。

¹²対論者の主張を問答式にするときは、能遍を帰結に、所遍を論証因に充てる。

¹³小野田 [1992: 40-42] を参照。

¹⁴'dod('dod pa) は文意に応じて「主張する」「認める」に訳し分けている。

〔その論証因とその帰結の〕
遍充〔関係〕があることが帰結する。
dkar po dang dmar po gnyis kyi gzhi mthun
med pa'i phyir /
なぜならば、白と赤の両者に共通の基体がないからである。

ma grub na /

〔その論証因は〕成立しない、と言うならば、

dkar po dang dmar po gnyis kyi gzhi
mthun med par thar /
白と赤の両者に共通の基体がないことが帰結する。
dkar po dang dmar po gnyis 'gal ba yin
pa'i phyir /
なぜならば、白と赤の二つは反対〔概念〕であるからである。

〔対論者は、答に窮するか、認める('dod)。ここで問答は終了する。〕

A【対論者の主張】では、対論者の主張が提示される。これ自体が問答形式になっている場合が多い¹⁵。

B【対論者の主張を問答する】では、先に示された対論者の主張について問答が展開される。対論者の主張に対して立てられた問答式に対して、対論者は「〔論証因は〕成立しない」(ma grub)と答えている。答論者は、論証因の成立の可否を検討するため、論証因を帰結にして、再度問答式を起す。それに対して、対論者は、再び、「〔論証因は〕成立しない」(ma grub)と答えている。再度、答論者は、論証因を帰結にして、再度問答を起す。これについて、対論者は、答に窮するか、認めて、問答は終了する。

このB【対論者の主張を問答する】部分の目的は、対論者の主張の分析あるいは対論者の主張に誤りを指摘することである。

C【答論者が自分の主張を問答する】では、もとの対論者の主張に対して、答論者が自分の主張（自説）の問答式を起して問答を展開する。自説の問答式に対して、対論者は、「〔その論証因がその帰結によって〕遍充されていない」(ma khyab)と答える。答論者は、「遍充される」と

主張して論証因を示す。それに対して、対論者は、再び、「〔論証因は〕成立しない」(ma grub)と答える。再度、答論者は、論証因を帰結にして、問答式を起す。これについて、対論者は、答に窮するか、認めて、問答は終了する。

このように『セドゥラ』ではA【対論者の主張】、B【対論者の主張を問答する】、C【答論者が自分の主張を問答する】が一つの完結した問答を構成する。この類型をA+B+Cとする。

2 『サムスクチェンモ』『サムスクチュンワ』の問答記述の類型

教科書は各テーマに「他説の否定」「自説の設定」「論難の排除」の三つ(dgag gzhas spongs gsum)を設定する。「他説の否定」と「論難の排除」において複数の問答が記述されている。ひとつの問答の開始は「ある人が〔次のように〕言う」(kha cig na re [kho na re])によって示される¹⁶。

2.1 A+B+Cの例

『サムスクチェンモ』『サムスクチュンワ』においても『セドゥラ』の基本型A+B+Cをみることができる。

『サムスクチェンモ』[G16.11]の例を示すことにする。

yang kha cig gis / srid rtse'i snyoms 'jug yin na /
dmigs nam mi gsal bas khyab zer na / sangs rgyas
'phags pa'i rgyud kyi de'i snyoms 'jug chos can /
der thal / de'i phyir / de yod pa'i phyir / rtags grub
cing 'dod mi nus te / de nam mkhyen yin pa'i
phyir de / de ye shes chos sku yin pa'i phyir de
/ sangs rgyas 'phags pa'i rgyud kyi snyoms 'jug
dgu po gang rung yin pa'i phyir / khyab ste / rtsa
bar / snyoms 'jug dgu yi bdg nyid dang // chos kyi

¹⁶問答の開始は「またある人が〔次のように〕言う」(yang kha cig na re)「〔そう言った〕ことについてある人が〔次のように〕言う」(byas pa la kho na re)などの場合もある。「また」(gzhan yang)からは、答論者の主張（自説）が続く。一部対論者の主張についての検討も含まれる場合もある。

¹⁵本稿 2.2 を参照せよ。

sku zhes brjod pa yin // zhes gsungs pa'i phyir /

〔対論者〕 〔答論者〕

A 【対論者の主張】

yang kha cig gis /

また、ある人が〔次のように〕言う。

srid rtse'i snyoms 'jug yin na / dmigs nmam mi gsal bas khyab zer na /

〔それが、〕有頂天の静慮であるならば、〔それは〕対象の相が不明瞭であることによって遍充される、と言うならば、¹⁷

B 【対論者の主張を問答する】

sangs rgyas 'phags pa'i rgyud kyi de'i snyoms 'jug chos can /

仏聖者の相続のその（有頂天の）静慮を主題として、

der thal /

そう（対象の相が不明瞭）である

ことが帰結する。

de'i phyir /

なぜならば、そう（有頂天の静慮）であるからである。

de yod pa'i phyir /

なぜならば、〔仏聖者の相続に〕それ（有頂天の静慮）があるからである。

rtags grub cing

論証因は成立している。¹⁸

C 【答論者が自分の主張を問答する】

'dod mi nus te /

〔わたしはそのように〕認めることは

¹⁷この問答における対論者の主張は『俱舍論』に見出される主張である。AKBh 437.2: bhavāgram āsvādanāsamprayuktam śuddhakam (櫻部・小谷・本庄『智品・定品』238.15: 「有頂は味と相応するのと清浄なのとである。無漏なのは無い」) ヤシヨミトラはこれを次のように説明している。AKVy 671.20: anāsravam nāstīti samjñamāndyāt (櫻部・小谷・本庄『智品・定品』239.16: 「無漏なのは無いとは、想が朦朧としているからである」) 『サムスクチェンモ』[G13.6] に srid rtse'i sems 'du shes mi gsal bas (「有頂天の心は想が不明瞭であるので」) とある。

¹⁸仏聖者の心相続において対象の相が不明瞭であるということはある得ないという前提によって、対論者の主張の誤りを示している。

できない。

de mam mkhyen yin pa'i phyir de /

なぜならば、それ（仏聖者の心相続のその（有頂天の）静慮）は一切智であるからである。

de ye shes chos sku yin pa'i phyir de /

なぜならば、それ（仏聖者の心相続のその（有頂天の）静慮）は智慧の法身であるからである。

sangs rgyas 'phags pa'i rgyud kyi snyoms

'jug dgu po gang rung yin pa'i phyir /

なぜならば、仏聖者の心相続の九種の静慮¹⁹のいずれかであるからである。

khyab ste /

〔〔それが〕 仏聖者の心相続の九種の静慮のいずれかであるならば、〔それは〕 智慧の法身であることによって〕 遍充される。

rtsa bar / snyoms 'jug dgu yi bdag nyid dang /

/ chos kyi sku zhes brjod pa yin // zhes

gsungs pa'i phyir /

なぜならば、根本（『現観莊嚴論』）において、「九種の静慮の本質と〔・・・(中略)・・・〕は、法身と呼ばれる」²⁰と述べられているから

である。

C 【答論者が自分の主張を問答する】 部分の最初の句が、「対論者がもとの主張を（まだ）するならば」（rtsa bar 'dod na）ではなく、「〔わたしはそのように〕認めることはできない」（'dod mi nus te）になっている。これは講義教科書の

¹⁹九種の静慮とは、四色界静慮、四無色界静慮、滅尽定のことである。

²⁰AAV VIII 1-6 (103.5-104.5): sarvākārām viśuddhiṃ ye dharmāḥ prāptā nirāsravāḥ / svābhāviko muneḥ kāyas teṣāṃ prakṛtilakṣāna //1// bodhipakṣāpramāṇāni vimokṣā anupūrvaśaḥ / navātmikā samāpattiḥ kṛtsnam daśavidhātmaḥ //2// abhibhvāyatanāny aṣṭa prakārāṇi prabhedataḥ / araṇā pranidhijñānam abhijñā pratīsaṃvidāḥ //3// sarvākārāś catasro 'tha śuddhayo vaśitā daśa / balāni daśa catvāri vaiśāradyaṇy arakṣaṇam //4// trividham smṛtyupashtānam tridhāsammośadharmmatā / vāsanāyāḥ samudghāto mahatī karuṇā jane //5// āvenikā muner eva dharmmā ye 'ṣṭādaśeritāḥ / sarvākārājñatā ceti dharmmakāyo 'bhidhīyate //6// 一切相智と智慧法身の属性として18種のものが枚挙されている。九種の静慮は智慧法身の属性として智慧法身によって遍充される。

ひとつの特徴である²¹。この表現に続いて自説が展開される。

2.2 A+B'+C の例

次に、B【対論者の主張を問答する】部分が対論者の主張の誤りの指摘ではなく対論者の主張の分析を意図している例を示す。このA+B'+Cの形式の問答は『サムスクチェンモ』に典型的である。『サムスクチェンモ』[G5.5]で示すことにする。

yang kha cig na re / ngan 'gro'i rten la de gsar du
skye ba med de / ngan 'gro ba rnams bskal ba 'jig
pa'i tshe bde 'gror skyes nas snyoms 'jug gsar du
sgrub dgos kyi gang zag yin pa'i phyir zer na /
sbyor ba de'i rtags grub par thal / dam bca' 'thad
pa'i phyir / 'dod na / ngan 'gro ba yin tshad bskal
ba 'jig pa'i tshe bde 'gror skye ba dang snyoms
'jug gsar du 'thob dgos yin par thar / ngan 'gro
ba thams cad de'i tshe de ltar byed dgos yin pa'i
phyir / 'dod mi nus te / ngan 'dro ba la de'i sngon
du thar ba thob par 'gyur nges kyang yod / de'i
sngon du las sgrib zad 'gro mkhan yang yod pa'i
phyir te / ngan 'gro ba yin na de'i bar du ngan
'gror sdod pas ma khyab pa'i phyir / rtags rnams
sla /

〔対論者〕 〔答論者〕

A【対論者の主張】

yang kha cig na re /

また、ある人が〔次のように〕言う。

ngan 'gro'i rten la de gsar du skye ba med de /

悪趣を〔身〕依として、それ（根本定）が初めて生じる
ことはない。

ngan 'gro ba rnams bskal ba 'jig pa'i tshe bde 'gror skyes
nas snyoms 'jug gsar du sgrub dgos kyi gang zag yin pa'i
phyir zer na /

なぜならば、悪趣のものたちは劫がつきるとき、善趣に
生じて静慮を初めて達成する必要がある者であるからで
ある、と言うならば、

²¹ 講義教科書の 8 割がこの形式である。

B【対論者の主張を問答する】

sbyor ba de'i rtags grub par thal /

この問答式の論証因は成立していることが帰
結する。

dam bca' 'thad pa'i phyir /

なぜならば、主張は合理であるからで
ある。

'dod na /

認める、と言うならば、

ngan 'gro ba yin tshad bskal ba 'jig pa'i tshe

bde 'gror skye ba dang snyoms 'jug gsar

du 'thob dgos yin par thar /

あるかぎりの悪趣のものは、劫がつきるとき、
善趣に生れ、静慮を初めて得る必要があるも
のであることが帰結する。

ngan 'gro ba thams cad de'i tshe de ltar

byed dgos yin pa'i phyir /

なぜならば、すべての悪趣のものは、その
（劫がつき）とき、そのようにする〔静慮
を初めて得る〕必要があるものであるからで
ある。

C【答論者が自分の主張を問答する】

'dod mi nus te /

〔わたしはそのように〕認めることはでき
ない。

ngan 'dro ba la de'i sngon du thar ba thob par

'gyur nges kyang yod / de'i sngon du las sgrib

zad 'gro mkhan yang yod pa'i phyir te /

なぜならば、悪趣のものの中に、その（悪
趣に生れる）前に解脱を獲得することが確定
しているものもあり、その（悪趣に生れる）
前に業障をなくしているものもいるからで
ある。²²

ngan 'gro ba yin na de'i bar du ngan 'gror

sdod pas ma khyab pa'i phyir /

なぜならば、〔そのものが〕悪趣であるなら
ば、〔そのものは〕それまでに、悪趣であつ
たことよって遍充されないからである。²³

²² 解脱を獲得することを確定したり、業障をなくすた
めには、静慮が必要である、という前提によっている。

²³ 前世において、善趣にいて初静慮の直前まで修習し、
律も得たことがあることを含意している。

rtags rnamts sla /

諸証因は簡単である。

この例においては、A【対論者の主張】において対論者の主張が問答形式で提示されている。B【対論者の主張を問答する】部分においてはA【対論者の主張】において提示された主張を否定するには至っていない。C【答論者が自分の主張を問答する】部分では問答式によって自説が主張されている。この部分がこの問答の核心部である。

2.3 A+C の例 (【対論者の主張を問答する】部分を省略する場合)

2.3.1 『サムスクチェンモ』に現われる例

ドゥラ書では問答においてB【対論者の主張を問答する】部分が中心的役割をはたす。ドゥラ書では問答は対論者の主張の誤りを指摘することを目的とする。ところが、『サムスクチェンモ』『サムスクチュンワ』にはこのB【対論者の主張を問答する】部分を省略している例が多く見られる。『サムスクチェンモ』[G4.22]を例として考察する。

des na kha cig na re / yi dwags sogs de dag tu
skye srid len kha ma'i lha yod zer ba'n mi 'thad
par thal / de dag tu skye srid len kha ma yin na lha
ma yin dgos pa'i phyir te /skye ba gnyis par ngan
'gror skyes nas sdug bsngal myong 'gyur gyi lha
'chi kha ma de dang ngan 'gro'i skye srid gnyis
kyi bar du bar do brgyud dgos pa'i phyir te / de
'dra'i ngan 'gro ba'i bar srid yod pa'i phyir / ma
grub na / de 'dra'i yi dwags de chos can / khyod
kyi bar srid yod par thal / khyod gzugs chan gyi
'gro ba rigs drug gang rung yin pa'i phyir /

〔対論者〕 〔答論者〕

A【対論者の主張】

des na kha cig na re /

それによるならば、ある人が〔次のように〕言う。

yi dwags sogs de dag tu skye srid len kha ma'i lha yod zer
ba'n

餓鬼などがそれら〔餓鬼〕に生を得る直前の天がある、と
言うことも、²⁴

C【答論者が自分の主張を問答する】

mi 'thad par thal /

〔そのように言うことも〕不合理であることが帰結する。

de dag tu skye srid len kha ma yin na lha ma
yin dgos pa'i phyir te /

なぜならば、〔ある者が〕それら〔餓鬼など〕
に生を得る直前であるならば、〔その者は〕
天ではない必要があるからである。

skye ba gnyis par ngan 'gror skyes nas

sdug bsngal myong 'gyur gyi lha 'chi kha ma

de dang ngan 'gro'i skye srid gnyis kyi bar

du bar do brgyud dgos pa'i phyir te

なぜならば、〔その者は〕次の生に悪趣に生

れて苦しみを体験するであろう天の臨死時と

〔次に生れる〕悪趣の生の二つの間の中有を
経る必要があるからである。

de 'dra'i ngan 'gro ba'i bar srid yod pa'i

phyir /

なぜならば、そのような〔次の生に悪趣に生

れて苦しみを体験するであろう天の臨死時と

〔次に生れる〕悪趣の生の二つの間の中有を
経る必要がある) 悪趣〔の直前の〕中有があ
るからである。

ma grub na /

〔その論証因は〕成立しない、と言うならば、

de 'dra'i yi dwags de chos can /

そのような〔次の生に悪趣に生れて苦しみを

体験するであろう天の臨死時と〔次に生れる〕

悪趣の生の二つの間の中有を経る必要がある)

餓鬼のそれ〔餓鬼〕を主題として、

khyod²⁵ kyi bar srid yod par thal /

それ〔餓鬼の生れる直前〕の中有があること
が帰結する。

khyod gzugs can gyi 'gro ba rigs drug gang

rung yin pa'i phyir /

²⁴直前の前世に中有がある場合とない場合について示すための問答である。

²⁵khyod は一般には二人称代名詞であるが、問答式においては主題を指し示す。小野田 [1979, 1992: 49] を参照。

なぜならば、それ(餓鬼)は色を持った六種の衆生のいずれかであるからである。

この例では、C【答論者が自分の主張を問答する】部分の最初の語句は、「[そのように言うことも] 不合理であることが帰結する」(mi 'thad par thal) になっている。これは、「[わたしはそのように] 認めることはできない」('dod mi nus te) と同じ働きをする。「遍充しない」(ma khyab) が用いられる場合もある。

ドゥラ書以外の教科書の場合は、あくまで答論者の主張(自説)を解説することが目的であるため、B【対論者の主張を問答する】部分を省略する例が多く見受けられることになる。

2.3.2 『サムスクチュンワ』に現われる例

『サムスクチュンワ』[G3.12]を引用する。

yang kha cig na re / ngan song gsum du skye srid len kha ma'i lha yod zer ba mi 'thad de / de dag tu skye srid len kha ma yin na bar srid pa yin dgos pa'i phyir /

〔対論者〕 〔答論者〕

A【対論者の主張】

yang kha cig gis /

また、ある人が〔次のように言う。〕

ngan song gsum du skye srid len kha ma'i lha yod zer ba
三悪趣に生れる直前の天がある、と言う

B【答論者が自分の主張を問答する】

mi 'thad de /

〔そのように言うことは〕不合理である。

de dag tu skye srid len kha ma yin na bar srid
pa yin dgos pa'i phyir /

なぜならば、〔ある者が〕それら(三悪趣)に生れる直前であるならば、〔その者は〕中有であることが必要であるからである。

この『サムスクチュンワ』の例は、問答というよりは、対論者の主張と、答論者の主張(自説)を示しただけともいえる。問答形式の記述ではあっても、ここまで簡潔であれば、問答と

言えるか疑問で自説を示しているだけでもみなせる。

2.4 A+B の例 (【答論者が自分の主張を問答する】部分を省略する場合)

A【対論者の主張】 B【対論者の主張を問答する】 C【答論者が自分の主張を問答する】の三つの部分のうち、B【対論者の主張を問答する】部分において対論者の主張に誤りを指摘するだけで、C【答論者が自分の主張を問答する】部分を省略している例がみられる。『サムスクチュンワ』[G4.3]より引用する。

kha cig gis / ngan 'gro'i ba yin na / las sgrib shas che ba rgyud ldan gyi gang zag yin pas khyab zer na / las sgrib shas che ba zad nas skye ba gnyis pa la dal 'byor gyi rten thob nges kyi 'chi 'pho kha ma'i ngan 'gro ba chos can / der thal / de'i phyir /

〔対論者〕 〔答論者〕

A【対論者の主張】

kha cig gis /

また、ある人が〔次のように言う。〕

ngan 'gro'i ba yin na / las sgrib shas che ba rgyud ldan gyi gang zag yin pas khyab zer na /

〔ある者が〕悪趣の者であるならば、〔その者は〕非常に大きな業障を心相続が持っている人であることによって遍充される、と言うならば、

B【対論者の主張を問答する】

las sgrib shas che ba zad nas skye ba gnyis pa
la dal 'byor gyi rten thob nges kyi 'chi 'pho kha
ma'i ngan 'gro ba chos can /

非常に大きな業障が尽きたあと、次の生に、有暇具足の所依が獲得されることが確定している死の直前の悪趣の者を主題として、

der thal /

それ(非常に大きな業障を心相続が持っている人)であることが帰結する。

de'i phyir /

なぜならば、それ(悪趣の者)であるからである。²⁶

²⁶帰結と論証因は対論者の主張によっている。問答式

帰謬論法の典型的な例である。この類型は、ドウラ書である『セードウラ』に典型的である。

3. 結語

『セードウラ』はドウラ書であるため、問答を重視したA+B+C、A+Bが多用される。『サムスクチェンモ』は、教義内容を問答しながら詳細に解説するためにA+B'+Cを頻用する。また対論者の主張に関する問答を省略するA+Cの使用も見られる。『サムスクチュンワ』は、他説に対して問答を省略し簡潔に自説を述べるものとしてA+Cを用いる。この問答類型は、『サムスクチェンモ』『サムスクチュンワ』が教義を示す教科書であることの反映である²⁷。問答記述による教科書は、問答によって生徒たちに考えさせるという問答自体が持っている意味と、内容を論理的体系的に示すという二つの教育的意味を持っており、僧院教育において重要なポイントである。

テキストおよび参考文献

テキスト

Phar phyin skabs dang po-skabs brgyad pa bStan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan gyi mtha' dpyod shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i don kun gsal ba'i rin chen sgron me - stod cha ('Jam dbyangs bzhad pa). Mundgod: Drepung Gomang Library, 2000.

bSam gzugs chen mo bSam gzugs kyi snyoms 'jug rnams kyi nam par bzhag pa'i bstan bcos thub bstan mdzes rgyan lung dang rigs pa'i rgya mtsho skal bzang dga' byed ('Jam dbyangs bzhad pa). Mundgod: Drepung Gomang Library, 2000.

bSam gzugs chun ba bSam gzugs chen mo las mdor bsdus te bkod pa bsam gzugs kyi nam bzhag legs bshad bum bzang (dKon mchog 'jigs med dbang po). Mundgod: Drepung Gomang Library, 2000.

bSe bsdus grwa Tshad ma'i dgongs 'grel gyi bstan bcos chen po nam 'grel gyi don gcig tu dril ba blo rab 'bring tha ma gsum du ston pa legs bshad chen po mkhas pa'i mgul rgyan skal bzang re ba kun skong (bSe ngag dbang bkra shis). 北京: 民族出版社, 1996.

の主題に対論者の主張の例外を置くことによって帰謬に導いている。

²⁷『般若全明宝灯明』はA+B'+C、A+Cに加えてA+B+C、A+Bをよく用いる。教科書の内容によって問答タイプの現われ方に多少の違いがある。

AAV Abhisamayāramkārikārikāsāstravivṛti (Haribhadra): K. Amano ed. 平楽寺書店, 2000.

AKBh Abhidharmakośabhāṣya (Vasubandhu): P. Pradhan ed. Patna. 1975.

AKVy Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā (Yaśomitra): U. Wogihara ed. 山喜房佛書林, 1990.

参考文献

櫻部建・小谷信千代・本庄良文

2004 『俱舍論の原典研究 智品・定品』大蔵出版

ゲシェーラプテン・小野田俊蔵

1984 『チベットの僧院生活』平河出版社

小野田俊蔵

1979 「問答 (rtsod-pa) における“khyod”の機能について」『日本西蔵学会々報』25: 4-6

1989(1) 「ドウラ書の系譜」『印度学仏教学研究』37-2: 825-819

1989(2) 「チベットの学問寺」岩波講座東洋思想第11巻岩波書店

1992 *Monastic Debate in Tibet*. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, heft 27. Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien.

2000 「チベット僧院での仏教研究法—問答学習の特徴と効果について—」『日本仏教学会年報』66: 133-143

福田洋一

2002 *Index to Propositions of the Tibetan Logic*. 『西蔵仏教基本文獻』第7巻(東洋文庫)

2003 「初期チベット論理学における mtshan mtshon gzhi gsum をめぐる議論について」『日本西蔵学会々報』49: 13-25

2004 「チベット論理における ldog pa の意味と機能」『佛教学セミナー』80: 1-23

2010 自相のアポーハ・觀念のアポーハ・普遍・特殊・矛盾・統合—チベット論理学における概念操作の方法—『チベット論理学研究』1: 223-241

木村誠司

1996 「チベット仏教における『プラーナの定義』」『駒澤短期大学佛教論集』2: 250-230

1997 「定義とプラーナの定義」『駒澤短期大学佛教論集』3: 260-244

1998 「チベット仏教における定義」『駒澤短期大学佛教論集』4: 272-245

Daniel E. Perdue

1992 *Debate in Tibetan Buddhism*. New York: Snow Lion.

(あおはら あきこ、広島大学大学院 [インド哲学])